

オーディオの総合誌

1963年7月20日第3種郵便物認可 2005年7月1日発行
第43巻第7号 毎月1回1日発行

stereo

2005

7

JULY

増大特集：スピーカー工作の愉しみ

★工作人間大集合2005／長岡鉄男のオリジナルスピーカーを作る／
キーワードは「16cm以下、2ウェイ」～7人の侍、スピーカー競作の
夏／ユニット組み立てから音質向上グッズまで～編集部競作／ネット
ワーク・パーツにこだわる／他



★話題の新製品を聴く [ユニバーサルプレーヤー部門]アコースティックアーツ SURROUND-PLAYER 1
[ADプレーヤー部門]ミッチェル GyroDec/TechnoArm [プリ・メインアンプ部門]マランツ PM-15S1
[リアアンプ部門]カイン SC-6L [AVアンプ部門]デノン AVC-A11XV [スピーカーシステム部門]ビク
ター SX-L33M K2/ペナウディオ Chara+Charisma/ピエガ CSLTD HE/フォステクス RS-2

★注目製品ファイル ビタスオーディオ SM-100/FAL MasterSE/CEC DA53

★[stereoディスクコレクション] 今月の優秀録音盤・今月の特選盤・今月の話題盤／目で見えるスーパー & リマ
スターCD/stereo READERS CORNER



デンマークから巨大なセパレート
アンプがやって来た。モノラルのパ
ワーアンプは1台で74kg。価格もステレ
オセットにすると小さなマンションなら買
えるのでは?というほどのもの。ビタス社の
シグネチャーシリーズだ。この製品を貝山知弘
宅に持ち込んで1週間ほど聴いて貰ったのが以下
のレポートです

file.054

VITUS AUDIO SL-100 SM-100

Control&Power Amplifier

一聴して鮮明なサウンドであることが判る。

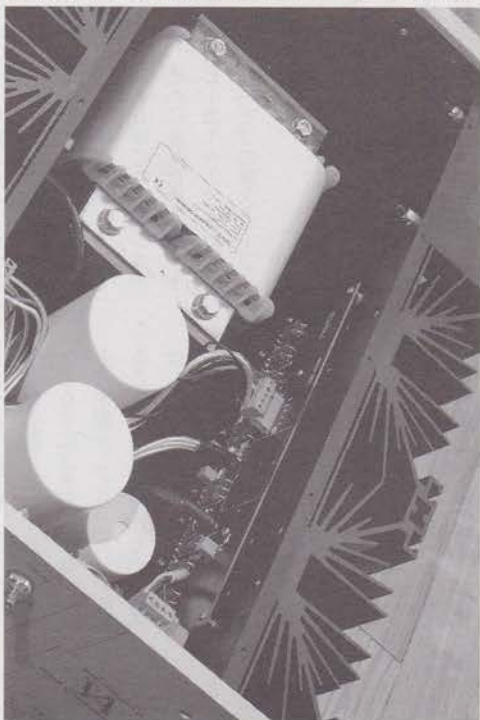
テュツテイでの力感、響きの深さも申し分ない

■TEXT ■貝山知弘

Vitus Audio (ビタスオーディオ) は、1997年にハンス・オレ・ビタスによって創設されたデンマークのオーディオメーカーである。今回、紹介するのは、同社のフラッグシップである「シグネチャー・シリーズ」のセパレートアンプで、プリアンプSL100とモノラル・パワーアンプSM100で構成するシステムである。

同社が目指すのは全世界で通用する音質のアンプで、そのためにダイナミックな力感と細部の緻密な描写が高い次元で

SL-100/コントロールアンプ ¥2940000
SM-100/パワーアンプ ¥529000pair



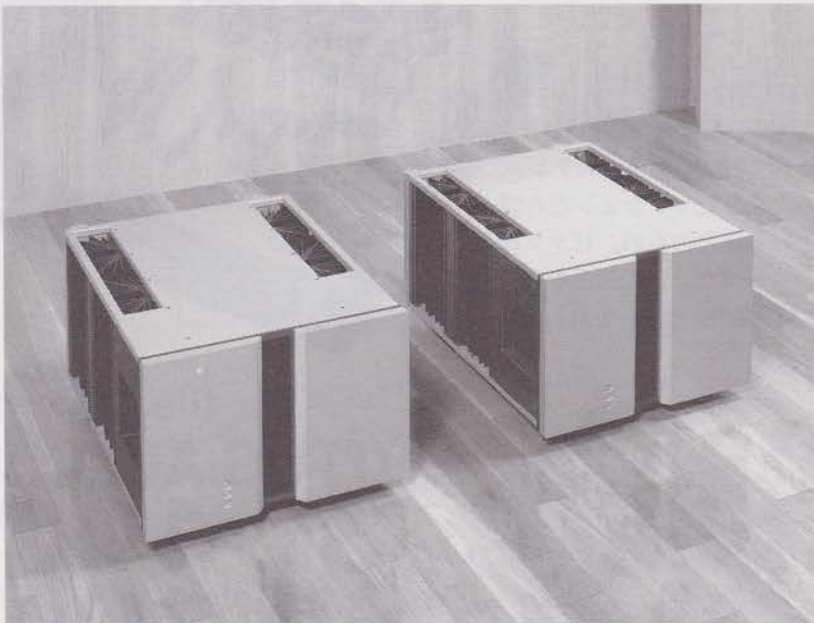
両立した製品造りが行なわれている。コストを無視しても音質を高めることに徹底していることは使用しているパーツを見て判る。大型の筐体で使用される金属はすべて非磁性体で、ビュアルミニウムとステンレススチールが採用されている。トランススターや抵抗器には、精度の高い選別品だけを使用している。また、同社の製品は完成から発売までの間に膨大な時間をかけてリスニングテストを行ない、その結果を製品にフィードバックしていることも大きな特徴だ。

SL100は、フルバランス回路で構成されたプリアンプである。アンバランス入力は専用回路でバランスド信号に変換される。ボリュームはスイッチで2本ずつの抵抗を切り換えるアナログのアツテネーターで、 $\odot 2 \sim \odot 60$ dBを24ステップで切換える。各ステップでの抵抗器が2個で済むことから、ビュアな音質が得られるのが特徴である。切換えことに一瞬ミューティングが働き音が瞬時途切れるのはやむを得ない。これは、使い勝手より音質を最優先させた思想が端的に現れた好例である。なお、このアツテネーターだけでは、音量を0まで絞りが設けられていないが、ミューティングスイッチが設けられているので問題は無い。

SM100は巨大サイズのモノラル・パワーアンプだ。幅は通常のコンボ

サイズだが、高さ31cm、奥行きは61cmもある。筐体の半分をしめるのが巨大な電源トランスと高品質で定評のあるRifa社の大容量の電解コンデンサーで、その大きさに圧倒される。この電源は、将来、12Vのバッテリー駆動が可能ないように設計されている。カタログ上では「単一電源方式」とあるが、専門的に言えば、「ミラーリングを行ない仮想の土電源を造

りだす電源で、かつてジェフローランドの大型パワーアンプが採用した方法だ。本機はプリアンプ同様フルバランス構成のBTL回路を採用している。採用した出力トランジスタは特注のバイポーラ型だ。Aクラス動作/A Bクラス動作が、フロントパネルに設けられたスイッチが切換えられ、両者の微妙な音質差を楽しむことができる。両者の最大出力は10



SM-100の主な仕様

| | |
|-----------|------------------------------------|
| 形式 | Aクラス/モノラル・パワーアンプ |
| 出力 | 100W |
| 周波数特性 | DC~800kHz |
| SN比 | 110dB以下 |
| 入力感度 | 1.3V |
| 入力インピーダンス | RCA=10k Ω /XLR=300 Ω |
| 大きさ | 310W X 435H X 610Dmm |
| 重量 | 74kg |



0Wと変わらないが、消費電力はAクラスで900W、A Bクラスで1000W。Aクラス動作時には、いかに大きな電流を流しているかが判る。本格的なAクラスアンプを作るには、1000Wの出力のためにこれだけ巨大な電源が要するというのを改めて認識させられる。

【試聴記】

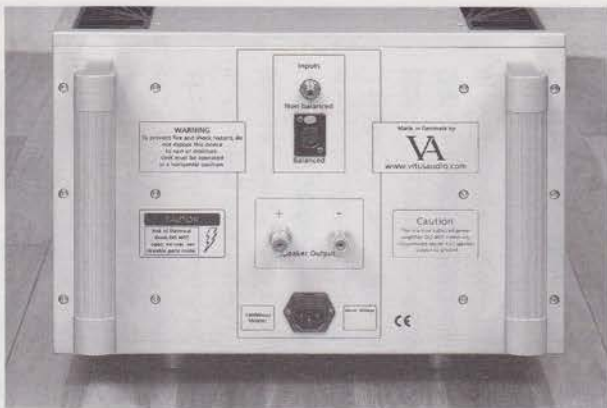
試聴は自宅の試聴室「BOISS NOIR」(ボウ・ノワール)で行った。スピーカーはウイーンアコースティックT-3G、スーパートウィーターはテクニクSEAS-10TH1000、CDトランスポートはフェイズテックCT-11+ゴールドムンドDIGIC(DAコンバーター)、SACDプレーヤーはデノンDSC-A100である。電源は200Vをバッファオーディオのステップダウン/ノイズカット、トランス2台で100Vにして供給している。IPT-4000Aがパワーアンプ、プリアンプ用でIPT-1000AがCDトランスポートとDAC、それにSACDプレーヤー用である。スピーカーケーブルはアコースティック・リバイブの単心ケーブルを使用した。

大多数のアンプは初日から100%の性能を発揮できないことは経験上判っている。初日はウオームアップだけに止め、本格的な試聴は2日目からおこなった。試聴に使用したディスクはCDと

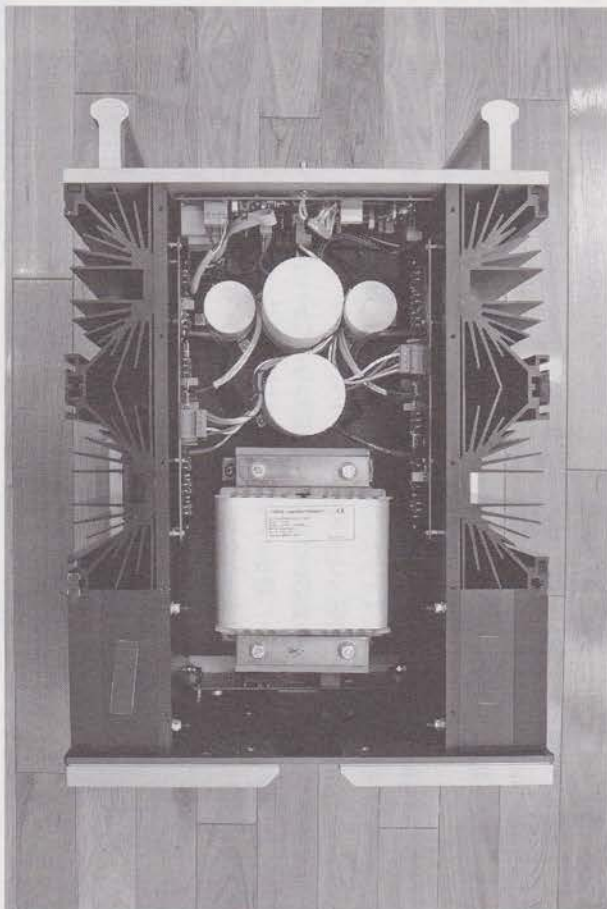
SACD。SACDに関してはもちろんステレオでの試聴である。

まず、わたしの試聴で定番となっているCD、ロッシーニの歌劇「アルジェのイタリヤ女」(輸入盤クラモフォン42733112)を聴く。アバド指揮ウィーンフィルの演奏だ。序曲の冒頭に現れるストリングスのピッチカートがクリアに響き、つづいて現れる木管の響きが音場内を軽やかに飛翔する。一聴して鮮明なサウンドであることが判る。テュッティでの力感、響きの深さも申し分ない。素晴らしい見通しのよさ、好ましく整ったエネルギーバランスである。全体に軽妙さが支配する曲想にびたりと合ったサウンドで、重量級の大出力アンプでとかく起りがちな誇張した低音でないことが、まず、気に入った。比較的小編成で演奏されるこの曲では、重たくブーミーな低音は必要がない。SL-100+SM-100による再生では、テュッティでも音が重々しくなったり、膨らんだりすることがなく、それでいて音の芯と力感もしっかり確保されている。

今回の試聴を通して感じたのは、このセパレートアンプの懐の深さである。必要ならば重い低音も、量感豊かな低音も表出するが、軽い低音、引き締まった低音にもリアルに対応できる。音色についても同様で、ソフトな音からシャープな音までの多彩な変化、しなやかな表現から引き締まった表現までの多彩な変化を



SM-100は入力、出力とも各1系統で余分な機能は一切ない



SM-100の内部。Aクラス動作時には900Wに消費に耐える電源トランスが大半のスペースを占める



シグネチャーシリーズを構成するコントロールアンプ SL-100

的確に描き分けることができるのだ。

ブレイズ指揮シカゴ交響楽団が演奏するストラヴィンスキー『火の鳥』（グラモフォンPOCCG11701）は、音の強弱差のダイナミズム、多彩な音色変化の見本市のようなディスクだが、ピタスのSL1100とSM1100のコンビは、その変化の度合いを時に緻密な階調で、時にダイナミックに描き分けた。このアンプで聴くと、この演奏が「色彩感が豊かだ」という評価が、いかに適切であるかということがよく判る。

本機で聴いて改めて感動したSACDは、ウイセルウェイ（チェロ）とラツィック（ピアノ）による『ベートーヴェ

ン／チェロソナタ&変奏曲全集（チャンネルクラシックSCCS SA22605）であった。どんな強奏時にもしなやかさを失わないチェロの美しい響きと、それに身を寄せつつ拮抗するピアノの響きがニュアンスに富む協奏を展開する様子が鮮やかに眼前に現れた。鮮やかに展開した。

SACD『オリエントの夢（アルヒーブUCGA17002）はヨーロッパのオケとトルコのパーカッショングループのコラボレーション。冒頭の2曲、イントロと「後宮からの脱出・序曲」では、テュッティの迫力が凄い。トルコの楽器を加えた打楽器部の強奏は、重低音の量

域まで充分なエネルギー感が維持されている。パーカッションの切れ味がいいことも特筆していい。太鼓の打音は膨らまらずに力強く響きわたる。

SACD『チャイコフスキー／交響曲第5番他（ヤルビ指揮エーテポリ交響楽団／BIS11408）では、セパレーションのいいリアンプ、モノラル・パワーアンプの利点フルに活きた見事な音場表現を堪能した。音場の透明度が高いので、演奏の細部までが見通せる印象だし、分解能が高いので、オーケストラ各パートの分離と定位が明確に表現される。このディスクは、各パートの分離と融合のさまをリアルに記録しているが、

一般の再生システムでは、その楽しさが伝わらぬことが多い。しかし、SL1100とSM1100のコンビは、オーケストラ演奏の面白さ、存分に味あわせてくれた。

巨大なパワーアンプから得られたのは極めて良質のサウンドと、表現の余裕であった。わたしは、多彩な音楽に対応するために、この余裕が不可欠であると考えている。今回の試聴ではこのアンプと1週間を過ごしたが、アンプの表現の余裕が生む安堵感が、自然な感性の開華を促したことが何度となくあった。「これなら一生付き合える」とわたしは思った。